

健康まちづくりのフューチャーデザイン

秋山 孝正*¹、盛岡 通*¹、北詰 恵一*¹

*¹ 関西大学 環境都市工学部 都市システム工学科

要旨： 本研究では、健康まちづくりの基本理念と健康都市に関する将来展望をフューチャーデザインとして提案する。すなわち、経済的開発を主体とした従来型のまちづくりに対して、健康な都市活動を中心としたまちの構成論を展開する。さらに、住民主体の自律的な未来志向型の都市を目指して、具体的な健康都市の将来展望を示すとともに、期待される都市活動に関するフューチャーデザインの提案を行う。

1. はじめに

本研究では、市民の健康的な都市活動を創生するための健康のまちづくりの基本理念の形成と将来の実装すべきまちづくりの展望に関して「フューチャーデザイン」として提案する。

このとき「健康」の概念に関して、WHO では、「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあること」と定義されている（日本 WHO 協会, 2010）。

本研究で述べる健康まちづくりにおいても、同様に市民の健康な都市生活を基本概念として、①病気の有無を基本とする医療的な健康状態に加えて、②健康な都市活動の基本となる日常的な健康状態を考える。市民の健康意識の向上に基づく「運動」に関連する健康増進活動による市民の健康度向上を目指すための具体的な方策を検討する必要がある。これは、市民の健康増進の都市活動を支援するための、健康広場、健康ロードなどの提案に対応する。いわば健康増進を目指した健康まちづくりである。一方で、市民の日常的な都市活動に関して、健康的な都市空間形成が検討できる。たとえば、公共交通の利用促進による交通手段の変化、良好な歩行空間の形成による歩いてたのしいまちづくりなどが対応する。いわば、日常生活様式の健康な変化を促す健康まちづくりである。

ここでは、医療・健康・福祉の側面に着目した健康まちづくりの構成と「フューチャーデザイン」について言及する。

2. 健康まちづくりの基本理念と構成

すでにプロジェクトでは、都市活動の視点から、市民のライフサイクルステージに対応した、都市の「健康」の概念について整理している。これを表 1 に整理する。

表 1 健康まちづくりにおける「健康」の範囲

①健康活動、スポーツ、体力増進	日常的健康
②健康増進、健康管理、病気予防	健康増進
③医療・治療	医学的健康
④元気な高齢者、アクティブシニア・バリアフリー	都市活動の健康
⑤介護予防、生活支援	社会的健康
⑥介護サービス、社会福祉	介護福祉的健康
⑦緩和ケア、こころの健康、認知症	心の健康

ここで、日常生活の健康（日常的健康）はすべての年齢層に共通する都市活動である。また、意識的に健康増進・健康管理を実行する活動がある。いわゆる病気（不健康）な状態においては、医療・治療行為が必要である。また高齢社会の加齢に関する問題は高齢層の健康として整理できるであろう。また介護や支援が必要な人に関して、介護予防については地域包括支援の社会的健康があり、一方で、介護サービスに係る範囲では、介護福祉的健康が定義できるであろう。また身体的健康に加えて、こころの健康を考えることができる。このように広義の健康については、図 2 に示す介護保険のサービスにおける

高齢者の分類に対応している。すなわち、元気な高齢者・自立できる高齢者・要支援者・要介護者である。

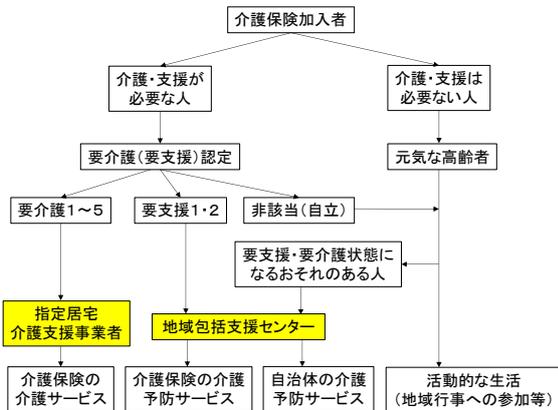


図2 介護保険によるサービスの利用

従来まちづくりにおいては、高齢社会の多様な健康に関する側面に対応しているとはいえない。すなわち、元気な市民の快適な都市活動の推進は健康の一側面ではあるが、介護サービスによる高齢者外出率の増加も健康な都市活動と位置づけることができるであろう。

広義の健康概念を踏まえたまちづくりは、総合的な健康を創造する必要があり、これらの構成要素は図3のように整理できる。

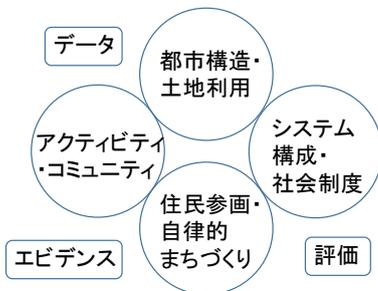


図3 健康まちづくりの構成要素

ここで、健康まちづくりの基盤となる都市構造・土地利用においては、健康・医療の中心施設としての大規模医療機関と都市交通システムの有機的構成が議論される。つぎに健康を意図した都市の活動（アクティビティ）と地域包括支援を支える地域活動（コミュニティ）の形成が課題となる。これらの都市活動は、健康まちづくりの仕組み（システム構成）および社会制度により規定される。最終的には、市民主体の自律的な都市の健康づくりが推進できる形態と未来志向型の運営組織（フューチャーセンター）の創設が望まれる。

以上のような、健康まちづくりのイメージを図4に整理することができる。



図4 健康まちづくりのイメージ

すなわち、主要なポイントとして、①市民医療拠点として、公共交通機関によるアクセスを備えた大規模医療施設を検討する。②介護福祉関連施設と連携して、地域コミュニティに基づく健康まちづくりを推進する。③地域はユニバーサルデザインによる空間移動を確保する一方で健康増進活動を促進するまちづくりとみちづくりを検討する。また④市民のための医療機関においては、必ずしも医療行為に限定されない、開かれた健康空間として役割を分担する。さらに、⑤市民主体のまちづくりを推進するとともに、健康ビジネスなどのイノベーションを推進するための組織としてのフューチャーデザインセンター(仮称)が設置される。

3. 市民参画と健康まちづくりの都市デザイン

健康まちづくりは、行政、医療・保健関係者等だけでなく、地域コミュニティに基づき市民によっても行われるべきものである。健康というテーマは、他のテーマと比較しても、市民ひとりひとりにとって関心が高く、それを活かした市民の力によるまちづくりが期待できる。エリアマネジメント組織やまちづくり協議会のような主体グループによって行われる場合でも、市民の自律的役割が期待される。

そこで、吹田操車場跡地まちづくりをきっかけとした「健康・医療まちづくり市民グループ」を結成し、勉強会を開始した。呼びかけ先は、吹田市立市民公益活動センター「ラコルタ」が発行する市民公益活動団体の活動紹介冊子『吹田市ボランティアグループ・NPOガイドブック平成25年(2013年)度版』の中で、「保健・医療又は福祉の増進」分野で活躍さ

れている団体、吹田操車場跡地がある岸辺に関わりのある団体を対象としており、当初は環境をテーマとする団体を含まなかった。

本研究会は、平成 30 年度に予定されているまちびらきのみをターゲットとするのではなく、その先に事業が進んでいく時期に至っても、組織形態はどのようなものであれ継続する予定であるが、現段階では、およそ 2 か月に 1 回程度で計 6 回開催している。一部を除いておおむね 10~19 名の参加を得ており、活発な議論が交わされている。

この研究会での議論は、次のようにまとめられる。
①当初は健康や医療をテーマとして始めたものの、比較的早い段階からメンバーの議論をきっかけに環境をテーマとした活動を行う市民への参加呼びかけが進められた。また、環境テーマメンバーから環境に特化した発言がなされても、議論の中で融合テーマへと展開していく可能性が見いだせた、②当該地域における地縁型組織と健康・医療についての志縁型組織が混在していても両者の見解が前向きなものに変化していった、③必ずしも地域性とは繋がっていなかったメンバーが地域課題をベースにした具体的な議論へと展開していった、などである。これらは、当初は必ずしも同じ方向を向いていなかった市民が、勉強会を通じて同じ情報をベースとして課題を共有していくプロセスとして捉えることができる。このことは、市民以外の比較的発言力の強い主体と議論を共にするエリアマネジメントや協議会のような場における市民の発言力を増すものと期待される。また、この事業の未来をデザインするにあたり、共有した未来像に向けたアクションが期待されると考えられる。

4. 未来デザインと健康関連事業の展開

【未来デザインの現在】

すでに著者らは、健康都市のパイロットを形成すべくウェルネスタウン(健都)と称する地区を始め、予防的健康づくり (health care & promotion) を都市イニシアティブで進める計画論的枠組みを考察し、特に都市におけるアウトドアでの健康づくりをまち空間のリノベーションと関連づけ、さらに健康づくりコミュニティの社会システムのデザインをエリアマネジメントや社会事業の企業と運営に活かす方向を論じてきた。

長寿社会の活力、社会システム由来の産業イノベーション、持続可能都市等の様々の課題に夢ある目標とその達成への道筋を描くことは人類共通のチ

ャレンジの対象となっている。

その際に世界の智慧の結晶である “Future Earth” (Rio+20) のフレームは極め付きの未来行動計画であり、その基本文書にある “Future Design” は健康都市や健康寿命、持続可能な暮らしを展望する際にも重要である。

北大阪健康都市の形成と運営をフィールドとして関わる中で明確になってきたその特徴は、次の点にまとめられる。

第一に未来を前向きに描写 (Innovative common design) し、第二に目標と道程 (Pathway) を自立的なビジネスや市民団体を含む関係者が共に策定 (Co-design) し、第三に学術による裏付けを行い (Evidence-based) ながら、第四に道標 (Benchmark) を設けて段階的かつ柔軟 (Active adaptive approach) に進めていく。

研究グループでは未来を描く体制とその中核的ツールに関して次のような事業を構築しつつある。

【未来デザインの 6 つの事業展開】

①参加型未来戦略デザイン工房を構築する

参加過程で戦略構築を図る方式として、第一のタスクとして次の試みを展開している。市民と共に未来を描く『ライフスタイル・ヘルス』では、健康都市像とその指標フレーム、健康都市指標の具体化と測定、評価、見直しの循環プロセスを提案している。具体的には市民健康づくり WS を開催し、健康体操 (撰津) や市民公益活動支援 (吹田) の両モデルを軸に、情報提供と支援ツールを開発している。

各地の健康都市イニシアティブを探索し、WHO European Healthy Cities Network の 53 指標や UN の SDGs の 17 群の指標特に健康と都市 (特に Goal3: Good health and wellbeing, Goal11: Sustainable Cities and Communities) の指標と照らし合わせ、日本型健康都市指標 v.1.0 として提案した。AHC のコアメンバーとしての尾張旭市他の協力のもとでその健康都市指標システムとデザイン工房機能の検証を行う予定である。

未来デザイン工房の第二のパイロットタスクとして、健康づくりへの地区協議を目指し、3km の遊歩道を活用し健康ひろばを活用してエリアマネジメントの核として活用すべく健康パーク WS の企画を試みた。さらに、周辺数百 ha、規模でのウォーキング・ネットワークを空間リノベーションと連動して行うシナリオの開発を試みた。

これらの試みを通し、人口 10 万人の都市規模での空間での健康づくりの方法論をリサーチラボの

情報機能（町丁目情報、小学校地区情報、国土数値情報）等で支えられた形で開発し、地域ごとの健康都市（広義の健康都市であって医療や高齢者福祉に限定せず）の達成度を評価し、GISベースで情報を系統的に分析、評価、翻訳するデザインルームを開発する。

② 健やかビジョンを未来模擬体験技術で描く

人類の叡智を謳った EXPO70 から和食への関心が注がれたミラノ博を追体験し、「健やかさ」の夢探検のショートメッセージをデジタルドキュメントとして系統的に蓄えるパイロット事業を構想する。この試みは選ばれた事項 (issues) 毎に興味から探索しうるデータベースとして収納する。

テーマの候補として食（かるしおレシピから健康グルメへ）、農（素材と育て方をまちで分かり合う）、見守り（安全安心のコミュニティ）、我がエネ（ゼロ・プラス集住）、からだ（自分流運動から自信を持てる）、マイ・ケア（セルフメディケーションが役立つ社会）等のドリーム V1.0 を開拓する。この目的を達成すべく、健康発想「夢旅」のサポート企業との協議を準備した。

③ 専門的目利き力開発プログラムの枠組開発

IRGC のエネルギー関連を含む 2015 年報告にある未来シナリオの描き方のうち、Forecast scenarios, Exploratory scenarios, Normative with “back-casting” approach, Sociotechnical scenarios with narratives and storylines of plausible futures, and Participatory scenarios のうち、広い健康連関を扱うには文脈的シナリオがふさわしいとの予見の下で、それらを健康都市づくりに援用する際の得失を整理した。

トレーニングを通して先を見通す眼力を身につけるフォアサイトのツールを開発すべく、その素材を 21 世紀中葉の医療福祉運用に取組む「豊四季台高齢コミュニティ論」や東大ビジョン研、各地の健康医療サービスや関連スクールの取組みに求めた。それらが育てようとする専門家向けの MOT の能力開発の描き方を比較として、俯瞰力、政策構想力、チームリーダー的な力量を養える人材育成プログラムを組み立てることを試行した。すなわち、課題山積の地域で各種資源（人材、連携組織、ナレッジ等）を投入する形でデザインする。健康サービスを地域で提供する際に、CCRC(日本版)等の熟年コミュニティを相手とする運営主体、対象者、力量評価法等とともに、社会連携（地域連携）のエクステンションを想定範囲に入れて、「健康サービス・プログラム」のフレームとプロセスを考察した。

④ 健康まちづくりの衆知熟慮のワークショップ

コミュニティの身近な関心とローカルな利害が時に食い違う都市交通（近隣から広域圏までのモード選択）、医療（年齢ステージと病類型ごとの健康度向上）のサービスを例に、多段階かつ熟度別に情報付与と協議を重ねるワークショップ方式を検討した。その原型となったのは健康ひろばの専門家の意見交換で噴出した志向性の違いに見られたトレードオフ状況を扱う方法の吟味である。

具体的には、「別の立場で代理発言する」、あるいは「遠くからの眼や関わりで考え直す」、「他の機会や時間帯を示して競合を避ける」、「協議の土俵を拡げる素材を加える」、「総花を整理すべく優先策を迫る」等の媒介と融合の道を示した。

⑤ シグナルを読み取り未来につなぐシステム設計

先行する健康増進事業や健康都市指標作成の試みに倣い、未来は現在に隠されていると見なし、シグナルを読み予測する実務的試みを行った。萌芽が普及へのスパイラルにつながる例を取り上げ、シグナルを主流化する社会デザインを検討した。

第一の例は、健康増進マネジメントの規格標準化である。フィットネスから健康運動支援へと拡げ、リハビリ（脳卒中リハビリ）を視野に入れつつ健康サービスを展開する事業の認証を考察した。次に職場の健康づくりの担い手である産業医等と連携して標準化（ISO）が進む組織の健康経営の評価軸を考察した。

第二には戦略的プログラムとしてのアクティブな健康づくりとしての「健康倶楽部」の実装である。健康体操や健康ウォークを体験しながらも運動の健康効果が確かめられていない弱点に鑑み、都市の市民および勤労者を募り、やや強い（5Mets、or 心拍 50%増）運動を促すガイド付きコミュニケーション・プログラムを開発し、実証実験を行った。健康運動が継続されるには、①適度な運動強度、②身体が喜ぶ多岐な運動、③五感の感受性、④喜びの感情と表情、⑤芸や身体表現、⑥仲間とつきあい、⑦会話と暮らし体験、⑧歴史まち学び、等のコミットメントが効果的と判断した。

⑥ スマートな健康都市の人間機械系の未来

健康増進を支える装置、機器の開発には利用者 と提供者との間に共創型のインターフェイスを要する(Future design in Human-machine Interface)。その目の例は介護の生活補助・動作支援の機器から身体（生体・情緒）ウェアラブル・センサー等に顕著にみられる。

しかし、その範囲と深さは院内、健康ひろば等に限らず、健康住宅街区、健康医療支援複合都市サービス、イノベーションパーク等を含むエリアをパイロット地区として広く取り上げることで、総合開発力が高まる。単独でロボット、非浸潤機器、介護機器等を「IoT」で高度化（脚色する）以上の可能性を健康都市拠点開発の未来は秘める。

まちぐるみの Smart Healthy Town がインキュベーションの機能やアライアンスの媒介機能、成長へのイノベーションの機能を持つように、その核としてのフューチャ・デザインの役割を構想した。

【未来デザインを進める世界の都市の試み】

以上の6つの未来を透視するフューチャ・デザインの舞台である都市の動向を世界中で探索すると、気候変動への首長リーダーシップから生まれたC40 や2010年よりICLEIと世界気候変動市長会議が興した Resilient Cities 等に加えて、経済人及びその財団がリードする会合が都市ネットワークを広げていて、共通して健康と環境の融合に焦点をあてている。

たとえば、100 Resilient Cities は Rockefeller Foundation が支え、Reflective, Resourceful, Robust, Redundant, Flexible, Inclusive, Integrated の質を訴える。Bloomberg Philanthropies が支える C40 との協働では、“accountability by using outcome-driven performance metrics”や“driving scalable and replicable actions at the city”を強調している。ブルームバーグ財団が焦点を与えているのは、“public health, environment, education, arts & culture および government, innovation”の5つの領域である。C40の Best Practice や 100 Resilient Cities の取り組みを見ても、Intelligent（情報未来）、Healthy（健康未来）、Environmentally Sustainable（地球環境の持続可能性）の融合を追求した都市が多いことを都市間比較調査で確認した。

イノベーションの格差を逆転させるカギは、これらの融合を地域と都市の固有の状況を活かして協力を推進することである。健やかなまちとコミュニティをつくる個々の行為が自立的な事業として継続して実装されるようなプラットフォームをまちが提供できるかどうかのカギである。世界の都市はその提供を競っているように思える。

追加するサービスがエンドユーザーに届くまでをトータルに検証するには、プロジェクトの「未来テスト」を試みるべきだ。気候変動下の健康の質を確保する先取りのアクションプランを構想するこ

とはテスト事例の一つだ。なぜなら、国内の従来の「風のみち」はポーズであってブルームバーグが強調した Outcome performance driven な施策に縁遠いからである。

敢えてこの事例に拘れば、適応策の健康（健康質）領域の一つの核に熱中症対策の表象に限定せず、モニタリング、適応プログラム、評価を一体化し、木陰と爽風を注視し、熱緩和の街区デザインを展開する中で、建物群と敷地の遮熱緑化、水流再生、ヒートアイランド対策等と並行して、3kmの遊歩道に涼しいランニング・ウォーキングを楽しめ、酷暑にも散歩やランニングを楽しめるクールスポットづくりなどを展開することだ。このことと熱中症患者の搬送の住まいと暮らしのスタイルの関連領域を築いていくことが欠かせない。

健康都市度を Benchmark とするまちのトランジション・マネジメントを試みることはこれからの課題である。研究チームとしては、WHO等の健康都市、SDGs等のサステナビリティ指標等の俯瞰の上に、10万クラスの都市のウェルネス、健康都市を診断し、健幸ランキング（見附等）、AHC（尾張旭市の“元気まる”等）等にも比較可能な都市指標を開発する準備を整えている。

5. おわりに

健康まちづくりのフューチャーデザインは、広義の医療・健康・福祉に関して、継続的なまちづくりの進化を目指すプロセスである。今後、多面的な研究成果を踏まえた体系的な整理と現実的なエビデンスの蓄積が重要であると思われる。

また、未来志向型のアプローチとして、健康まちづくりを普及させるために、内外の研究機関との連携・研究協議の推進を目指したい。

参考文献

- (1) 日本 WHO 協会、健康の定義について、<http://www.japan-who.or.jp/commodity/kenko.html> (2010).
- (2) 吹田市、摂津市、「健康・医療」のまちづくり、<http://www.suita-settsu-project.jp/> (2015).